

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
 昭和六十年七月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四三二号)

# 慈光

第三十七卷 第七号

## 次

信心を失った人に……………近角常観……………(1)  
 狂乱して所為多きが如し……………池山榮吉……………(5)  
◎波岡炭屋氏の詠 (4)夏下  
 知らされて有難きこと……………井上善右衛門……………(10)

## 目

13.7.27  
 ◎ 慈光日誌抄……………西元宗助……………(13)  
如信上人足伴月坊の口談  
 音の無い声……………高千穂正史……………(16)  
 み名を聞きて……………木村知己……………(19)  
 歎異抄に導かれて……………花田正夫……………(21)



# 信心を失った人に

比  
三才

従来もしばしば聞いたが、比頃また頻りに信心を失ったという訴を耳にすることである。真実の信心を得た人が之を失う道理はない。畢竟かつて入信の時、非常に喜んだ人が、年を経るに従って其喜びを失ったということであろう。

併し、其人自身は恰も信心その物を失ったかの如く非常に寂しく感じ、甚だしきは従来の信心は末徹底であったから、更に信心を戴き直さなければならぬ様に感ずるのである。そこで懇々と御慈悲の深いことを話すと、それは十分解っておるのである。然し前にはこれを聞いた時、大歡喜して内心も開發し、外境も一変して、人生実に更生した思があった。然るに何ぞ近頃は心境共に枯渴して、何等の感激もなく頗る荒涼たる有様である。こは御慈悲に見放されたのであるまいかと訴えらるるのである。

## 近角常觀

抑々入信の一念に感激の甚だしい人はとかくこの憾がある。甚だしいのは一句目も経ないのに此訴えする人がある。されどこれは入信の節全く煩悶暗澹とした心中に如来の慈悲眞実をいただいた時、その一念歡喜の心持ちを喜んで、其時戴いた如来の慈悲其物を忘れてしまった結果である。全体一念というのは其慈悲を戴いた始めであって、それ以後も其慈悲は変らず続いているのである。煩惱に眼さえられて、攝取の光明はみえないが、大悲はものうきことなく、つねに我身を照すなりで、喜べぬのは畢竟煩惱の所為である。けれども御慈悲は更に変りはないのである。煩惱にさへられて喜べぬものを殊に憐れみ給うが初一念より続いて下さる御慈悲である。それ故始めの時同様亦煩悶懊惱する者を特に憐れみ給う御慈悲に立ち帰るのが後念相續である。

この如く一念も後念も、煩惱具足の不実の我等に如来の眞実慈悲の加わって下さるのであるから、畢竟同様である。

生的不審に對して、聖人が人格的に同情されて仏の御慈悲を知らして下さったのである。

けれども、歎異抄の第九条に、殊に唯円房が後念について聖人にお尋ねしている。念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ことというのは、かつては唯円房天に踊り地に躍るほどに喜んだことがあったが、比頃はおろそかになつたという心持ちと見る事が出来る。また急ぎ浄土へ参りたき心の候はぬというのは、敢て往生浄土を疑うのではないが、法然上人の仰せの如く、病患を喜ぶほどに急いで浄土へ参りたき心がないという不審であろう。

信卷の終りに聖人が悲歎述懐されて、誠に知んぬ、悲哉愚禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、眞証の証に近づくことを快まらず、とあれば、明かに信後後念の御述懐である。親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にてありけり、というは、聖人が自己心中を打明けて、唯円房の喜べぬ心に同情し給うのである。これを聞いた唯円房は、恐らくは忽ち其御同情のために不審も過半晴れたことであろう。其上に喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱の所為なり、然るに仏かねてしらしめして、煩惱具是の凡夫と仰せられたることなれば、という御教化を聞いたならば大満足をしたであろう。聖人かねて唯円房の心をしらしめして、親鸞も此不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけりと、唯円房の喜べぬ人

殊に私がここに強調せんと欲するのは、「よく／＼案じみれば、天に踊り、地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよく／＼往生は一定と思ひ給うべきなり」という一節である。とかく此一節を一般の人が十分に徹底して戴いて居らぬ様である。大抵はよろこばいでもよいというようにとって居る。それではよろこべぬことを歎く人には、決して十分の安心を与えられぬ。如何にも喜ばいでもよいかなれど、喜んだ方が一層よろしい、現に他の人も喜んで居るのである、自分もかつて喜んだ覚えがあるのである。たとい喜ばいでもよいといわれても、是非再び喜んで見たいのである。且つ喜ばんでもよいというのは従にして、喜んだ方がよいという主が存しているのである。同じことならば主となって大いに喜びたいものである。この心持ちに對しては、喜ばいでもよいという慰めは何の効もないのである。

喜ぶべきことを喜ばぬにて往生は一定というのは、決して喜ばいでもよいというのではない。むしろ反對に喜べたら往生は不定である。喜べぬにて往生は一定であるということである。かく聞けば恐らくは愕然として驚く人がある



であろう。然し現に口伝抄には、明に断言されている。曰く「あやまてわが心の三毒もいたく興盛ならず、善心もしきりにをこらば、往生不定のおもいもあるべし、その故は、凡夫のための願と仏説分明なり、しかるにわが心凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねば、此願に洩れやせんと思ふべきによりてなり」と。

○たとえば天災地変の時、御見舞を頂いたとせよ。席を清め禮を備へて迎えんとすれども、天災中なれば取り乱したりとて、遠慮したれば如何。御見舞なれば遠慮に及ばずとは承知すれども、如何にも準備出来ないことを恐縮して固辞したれば如何。其時は声を励まして、其様に準備出来れば天災ではない。天災でなくば見舞の必要はない、準備が出来ないのでこそ、その惨状をしろしめして、不慍に思召す御見舞ではないかと仰せられるであろう。これが即ち天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり、という本願他力の意趣を聞いたのである。

○これを聞きたる初一念が即ち信心歓喜である。其時身心悦豫、踊躍歡喜である。然るに矢張り人生相對の塞風に遇えば喜ぶぬようになるのである。即ち喜ぶべき心をおさえ

○初一念の歡喜の為にさとりを開いて煩惱が無くなった様に思つて、信心を卒業した様に思うが一念義である。喜ぶぬことを歎いて念仏を繰返して、信心の武者修業をするのが多念義である。罪惡深重、煩惱熾盛の我等を憐れみ給う御慈悲を戴いた一念が相續して、喜ぶべき心をおさえて喜ばせざる、よく／＼煩惱の興盛なるわれらを憐み給う大慈大悲を仰ぐが後念である。口伝抄に、「一念を以て往生治定の時刻と定めて、其時の命延ぶれば自然と多念に及ぶ道理なり」とある。

○親鸞聖人が、大海の水を一毛を以て二三滂を滴り取らんに、喜ぶ心は二三滴の如く、大海の水は喜ばざるが如く、と仰せられたが此心である。蓮如上人が、時々懈怠することあれば、往生すまじきかと歎くものあるべし、かかる懈怠多くなる者なれども御助けは治定なり、有難や／＼と喜ぶ心を他力大行の催促なりと仰せられた。



て喜ばせざるは煩惱の所為である。こは初めてのことに非ず、初一念より天災地變の煩惱具足の貪瞋水火の難に階せんことを畏れざれという西岸上の喚声である。なお後念相續の上に水火来つて白道を湿し又焼くが如く、煩惱の為に信心も失われた様になるのである。併しながら仏かねてしろしめして、我等煩惱具足の凡夫に向つて、我能く汝を護らんと仰せなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が為なりけりと知られて、いよ／＼頼もしく覚ゆる次第である。

○ただここに注意すべきは、未だ御慈悲を知らざる者が始めて御慈悲を聞きたる一念は、恰もマツチが火を発したと同様である。如何にも自ら驚くばかりである。其後煩惱の為に喜ぶぬ様になった時は、マツチの燃えたのこりである。ローソクの燃え残りと同様になつて冷かな者である。二度と火を発さんと試みても無駄である。初一念同様の喜びを望みて、御慈悲を忘れて居るのである。煩惱具足の冷かなものを、かねてしろしめして憐み給う御慈悲を仰げば、喜ばぬにて、いよ／＼往生は一定と、燃え残りのマツチ、又はローソクに、初一念に戴いた御慈悲の火を移すべきである。故に初一念は燃え上るばかりの喜あれど、後念には荒涼たる心を憐れみ給う御慈悲を戴く底光のする相續である。

波岡茂輝歌集抄

一人あらば二人と思へと訓へたまふ祖師の御言葉尊きるかも  
我が如き思ひあがれるさかしらを助けたまはむ弘誓なりしか

をさな兒の母のふところにあるがごとみ仏にただにまかすべかりけり

古の聖はなべて時の世に容れられざりき寂しかりけむ

日輪はたださんさんと輝けり樹にこそ暗き蔭はありけれ

源の濁れる川もひたすらに海にそそぎておのづから澄む

何事か成し得べしとの夢さめてあやまり果てし後に道あり

うつし世に抱るべきものなしと思へど藁だにつかむ  
溺れたる身の

2.10.9



# 狂乱して所為多きが如し

池山榮吉

前々号に「父と子」と題して、我が子のために子守唄を歌う父なる人の姿に示唆された信的感情を述べたが、今回は少しその話を続けてみたい。

常不輕菩薩じゃないが、愛し子を抱いて子守唄を歌う姿に跪拜せしめられた私は、うちつけに、父王殺害の悔苦から救われた阿闍世王が教主世尊の慈恩を讃えた言葉に想到する。

「如来一切のために常に慈父母となりたまへり、まさに知るべし、もろくの衆生は皆これ如来の子なり。世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまふこと、人の鬼魅にくるはされて、狂乱の所為多きがごとし」

はたから見たらおかしいと思われるかも知れない恥も外聞も厭つていられないで、子守唄に専念する父の姿は、一切衆生の慈父母として、ものぐるわしいばかり劬勞してやまない如来矜哀の大悲を、端的に象徴したものはあるまいか。

こう書いてきて、ゆくりなくも思い浮ぶのは、聖人が、『教行信証』の終りに、「これによりて真宗の詮を鈔し浄土の要をひらふ、ただ仏恩の深きことを念うて人倫の嘲をはず」と誌された御文と、『歎異抄』の筆者が、おなじく筆を擱くに当って、「これさらにわたくしのことはにあらざといへども、経釈のゆくちもしらず、法文の浅深をこころへわけたることもさふらはねば、さだめてをかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむき百分が一、かたはしばかりをおもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり云々」と書き添えた言葉である。

一体これとあれ、というのは、一方は、前掲の聖人並びに『歎異抄』筆者の述懐の文と、他方の、さきに引用した阿闍世の仏徳讃歎の偈と、どういふ関係があつて斯く連想を喚び起すのだらう。一寸見たところでは、さっぱり縁のなさそうな両者の内容が、救済に没頭して、世間の毀譽を顧りみる違がないという点に一致しているからであらう。

そうと気付いて更に考え／＼してみると、そも／＼『教行信証』を著わし、『歎異抄』を書くというのが、要するに信への手引き、取りも直さず、安らかな眠りへ引き入れよう

がための子守唄をものするのと一般であるから、つまるところ、どれもこれも、子守唄につながる父と子<sup>の</sup>の象徴の中に納まってしまふのは、蓋し怪しむに足らないのである。

わたしは前回に所感を述べた中に、「子守唄の父と子について言えることは、類推的に仏と人についても言える。従つて経論聖教の多くは、子守唄の父と子のどこかに納まると言つていい位、子守唄に結ばれた父と子の心象は、広く且つ深いものである」と言つた。今回は私自ら愧として、いささかその納まり工合を試みて見ようと思つた。

それにつけて先ず、子供を誘い入れる眠りは、安らかさ、すなわち、さとり若しくは信心と決めて置く。

すると、父は、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願、即ち、本願であり、二河白道の西岸上によはわる人、即ち如来である。ひいては白道を行くべく決定を勧める東岸の人、即ち釈尊であり、下つては七祖であり、如来の教法をわれも信じ、人にも教へ聞かすむる、祖師聖人であり、阿彌陀仏に帰命せよといへる使、善知識である。更におしひろめては、普く信心の行者、念仏者一般をも含むと見て差支えない。

いふことなすべし

如算

さて父が本願、或は如来乃至念仏者であるとすると、その一切の所為は、他の合力をゆるさない自給自足の絶対他力の運為、所謂、如来廻向であり、また多少の語弊があるかも知れないが、一種の間接廻向とも見られる『歎異抄』第四章にいうところの「未徹りたる大慈悲心」の発動であり得る。

ところでその一切の所為、廻向の目的、動機とも見るべきは、『歎異抄』第三章の言をかりていえば「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意悪人成仏のため」であつて、その目指された悪人、煩惱具足の凡夫を象徴するのが抱かれた子供。

そしてその子供と父との間の心血の脈絡、通路が子守唄、すなわち念仏と見られるのである。

こういう風に観てくると、父と子と子守唄、即ち、如来と衆生と念仏と、三者別々に対立しているようであるが、其の實、父と子の心血が、子守唄を通して交互に流通するのが、攝取に約束された必然である以上、三つながら不可分の渾一体を成している。もつとも信前にあつては、久遠このかた子故の廻向わたり一人をかたおもひで、父から子への働きかけが一方的で、子からの感応を欠く未完成状態のうらみがあるが、信後にあつては、親子互に呼び交



吾も亦其光の大海大流の流に依りて流るれば、智慧の海に一味なり

わし、智慧のうしおに一味なる境界が展開して、所謂「本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願」三位一体的相関の關係にある。一を離れて他を考えることは全然不可能である。

子守唄の父と子の寓意を、現実の事例に引直して明瞭的確に見せてくれるのが、『歎異抄』第二章、聖人告白の御文である。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまらざるべしと、好き人のおほせをかむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり」

それ見給え！ここには「親鸞」がある、「ただ念仏」がある。「好き人」がある。そして「信ずる」がある。信完成への要因が不足なく具わっている。言うまでもなく「親鸞」は抱かれた子で、「ただ念仏して」は子守唄、「彌陀」は父、「好き人」は彌陀の代表、「信ずる」とは今將に眠りに集中しようとする子の意向である。

金銀珠玉の法文を、手当り次第掘り出して、子守唄の陳列棚に飾りつけようものと、僅に一鍬二鍬当てたかと思つたら忽ちにして、これはまた何んたる豊富な鉱脈に掘り当たつたものだろう。この鉱脈の埋蔵量は無尽蔵である。なぜかと云うと聖人の告白は、外に聖人直々の宗教体験

ことをするのも余計なことであるかに思われる。が、まあ兎に角、せめて範圍を『歎異抄』だけになりと限つて、その領域を跋渉して二、三の採集を試みることにする。

第二章の聖人の告白が、子守唄の父と子との現実化に外ならぬとすると、聖人が自己入信の極促を回顧瞑想して、当時の心の推異を跡づけたものと見られる第一章「彌陀の誓願不思議にたすけられまらせて、往生をばとぐるなり」と信じて「念仏申さんとおもひたつ心のおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり云々」とあるのも、「いたずらに惚うけていた子が、いつのまにか泌々と唄にききほれて、寝るほど樂はなかりけりと、よう／＼自覚の催おされる端的の叙述であり、その「念仏申さんとおもひたつ心」こそは、第九章の「煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」としられた諦忍に外ならず。又その煩惱具足の凡夫云々とあるのは、とりもなおさず第三章全体、特に「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるること、あるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」と一つことであり、而してその悪人成仏の「願をおこしたまふ本意」こそは、第九章の目ぬき「しかるに仏かねてしらしめして」の父の洞見

信的歷程の記録であると同時に、内に真宗の基礎的原理としての教・行・信・証を蔵しているからである。けだし、「ただ念仏して」は行、「彌陀にたすけられ」は証、「好き人の仰せ」は教、「信ずるほかに別の仔細なきなり」はそのまま信である。

『歎異抄』第十二章に「他力真実の旨をあかせるもろの聖教は、本願を信じ、念仏をまうさば仏になる、そのほかになにの学問かは往生の要なるべきや」とある。これは抄の筆者が、経論聖教の神髓を剔抉したものであるが、これもまた分けると教・行・信・証の四つになる。即ち、「他力真実の旨をあかせるもろ／＼の聖教」が教、「本願を信じ」が信、「念仏まうさば」が行、「仏になる」が証である。

こういうようなわけで、すでに経論聖教の主成分、教・行・信・証が一つ残らず第二章の聖人告白の中に具わり、その告白の事実を象徴化したものが父と子の姿であるとすると、その姿のうちに一切の経論聖教が網羅されてしまふことは言うまでもないことで、一々の文句を取り出して、ここかしこへあてはめる労をとるまでもないことになる。実は今度筆をとり始めた時は、広くいろいろの聖教を涉獵し恰好の文句を漁つて、父子心象の要所々々に充填しよう、と思つていたが、今の様に考えて見ると、わざ／＼そんな

である。

こうあげつらつてくると、足曳の尾のしだり尾の、はてしもない長談義し下手にきまつた長談義に陥るおそれがあるから、もうここいらで切上げて、ひとまず締めくくりをつけて置かずばなるまい。さてその決算の役割は、憚りながら聖人の御持言を煩わすことにしよう。

上來引用した『歎異抄』の諸種の御文―それに若し長談義を続けるであらうならもつと／＼引用するであらう所の御文―を挙げて、皆悉く内に蔵する根本的諦忍と視られるのが聖人の常の仰せ『歎異抄』末章に「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」とある御述懐である。試みに上に申された一々の文を、この御持言と対照してみるがいい。どれもこれも御持言の中に吸収されて余すところなきを感知するであらう。

もとの御持言は、聖人入信の刹那、心内面に滲み出た文字、つまり第二章の「信ずるほかに別の仔細なきなり」とあるその信内容さながらの録音であつて、従つて第二章の聖人の告白とは言葉こそちがえ、意は全く一つなのであるからである。すると子守唄の父と子は、御持言を譬喩化したものとも言えるのである。

えい／＼ほじくる



章終りに臨んで読者各位が子守唄を欠く父と子の成り行き  
がいかに出来ないみじめなものであるかを、ゲーテの詩の  
「魔王」にかんがみて、御一考あらんことを望み、ほんの  
意味だけの訳を掲げましょう。

魔王

この夜ふけに風の中を馬をとばしてゆくのは誰だろう！  
子供を連れとお父さんなんだよ  
お父さんは男の子を大事に抱いて  
しっかりとあなたかく抱えている  
坊や、お前はなぜにこわそうに顔をかくすんだい？  
お父さん！お父さんには魔王が見えないの？ 冠をかぶ  
つて着物の裾をひいているあの魔王が？  
坊や、あれは一叢の霧なんだよ。  
魔王 可愛い坊ちゃんね！わしと一緒に行かない？おも  
しろい遊びごとをして遊びましょう。  
岸にはいろ／＼の綺麗な花が咲いてるし、  
わたしの御母さんは金のおべべをたんと持つててよ。  
子 お父さんお父さん！お父さんには聞えないの？ 魔  
王が坊やに小ちやい声で言ってるのが？  
父 坊や静かにおし！落着いてね！  
これはね、さわ／＼と枯葉をわたる風の音だよ。

灰→灰

魔王 綺麗な坊ちゃん、わたしと一緒に行かない？ わ  
たしの娘達はよく坊ちゃんのお相手をしてよ、そして夜  
のダンスの音頭を取って、舞ったり踊ったり唄ったりし  
て坊ちゃんを寝かしつけてよ。

子 お父さん お父さん！お父さんには見えないの？

父 坊や坊や、それはよく見えているよ。

古い柳があんなに灰白く見えるんだよ！

魔王 わたしは坊ちゃんが大好き、坊ちゃんの綺麗な姿  
を見るとたまらない。言うことをきかなきゃ力づくで！

子 お父さんお父さん！魔王が坊やを掴まえるよ、魔王  
が坊やをひどい目にあわせるよ。

父は身の毛もよだつおもい、馬を早めて  
あえぐ子供をだきしめて  
やつとの思いで家についたが  
子は抱かれたまま死んでいた。

2. 11. 9.

知らされて有難きこと

病むという／＼な事が知らされます、これが病の徳とい  
うものでありましょうか。

先ず知らされた事は、人間は自分の意識にたよって  
は飛んでもない事になるといことです。高い熱が出て体  
が弱つてくると、意識は混沌とします。うと／＼と眠られ  
ればよいが、眠れません。朦朧とした意識の中で、立派な  
思いの影はみんな消えて、暗黒の中で妄念だけが躍るの  
です。次ぎ／＼と得体の知れぬ妄想が馳せてゆきます。芭蕉  
が病んだ最後の句に「旅に病んで夢は荒野をかけめぐり」  
とあり、とたしかありましたが、まことに荒野を駆けめぐ  
ります。その軀ののをただ見ているのではなく、私の意識全体  
が妄念に吹きまわられているのです。これが休と共なる意  
識の実態であります。

健康な時の日常の意識というものは、理性の統制下に何  
等か調整されています。病んで衰えると、その理性の統制  
力が失われて意識の底が露呈される。平素は手綱で操って

井上 善右衛門

いた馬が、その手綱がきかなくなつて狂い出すようなもの  
です。臨終の正念を期するというのは、まことに殊勝な思  
いでありすが、それは平素の時に抱く美しい期待ではあ  
りませんか。意識の底のわが実態に接すると、そんな安易  
な期待は、少なくともこの私には持つにも持てなくなりま  
す。横川法語に「妄念はもとより凡夫の地体なり、妄念の  
ほかに別に心は無きなり」とあるのは、よくも申して下さ  
ったものです。もし源信僧都が反対のことを申しておられ  
たら、この私は苦悶頓倒して悶死するでしょう。それにつ  
づいて「妄念の中より申し出したる念仏は濁りにしまぬ蓮  
のごとくにて」と申されています。

妄念よりほかないこの心の底の底のすつと奥に一条の光  
が輝いています。これは不思議です。ふと思いましたが、西  
田幾多郎先生が「わが心深き底あり喜びも憂の波もどどか  
じと思ふ」とうたわれたのは、この底の光をみつめられた  
のではなかつたかと。また思いました酒井演幽師が病床に

ものゝおととせせろ  
元禄六年 三月  
母の子桃中 三十三才で病死す



あつて「病みつかれ御名」声も称え得ず、弘誓のちかひいよ  
よ尊し」と叫ばれたその心を。南無阿彌陀仏は音声以前の  
真実です。声にして私の声ではない、妄念を貫いてこの私  
にとどいて下さる如来の喚声がナムアマミダブツにてしま  
す。「妄念の中より申し出したる念仏は……」と申された  
僧都の御心がさこそと僂べれます。

わが心に執われることなく、わが声にかゝることもなく、  
ただそこにあるのは南無阿彌陀仏ただ一つです。達者な時  
の思念というものには、我れ識らずいろ／＼な観念の雑物  
が色どりになつて織り込まれているものです。それを法味  
と思つて楽しんでゐるのは儂い自画自讃のようなものです。  
病んで弱つて観念の遊戯の働く余地がなくなるといふこと  
は、嫌念なしに自分の実態に帰着せしめられることです。  
人間の戯論からなか／＼解放され難いものですが、病んで  
知らされるのは、戯論の垢が洗われることだと思つと有難  
い事です。病の苦しみを無駄にせぬためには、戯論を離れ  
しめる病の徳をいただくには如はないと感じました。

さらにまたかえりみますと、病んでとことんまで妄念に  
悩むといふことは、妄念を厭離し慚愧せずにおれなくなる  
大きなよすがとなるといふことです。悩むと苦しい、そ  
うするとその苦を通れようとする願いが先き立つのですが、  
厭離とは苦の厭離ではなく妄念を厭離せしめられることで

て」と言い、歎異抄には「ただほれ／＼と彌陀の御恩の深  
重なること常に思出し参らすべし」と述べ「然れば念仏も  
申され候、これ自然なり」と述懐されています。二種深信  
のところは我れ識らず無一物中無尽蔵の法徳が法爾として  
与えられているのです。

仏徳の有難さを思うと、その真実に逆いつづけている己  
が心をたださずにおれない気持になります。道元禪師が、  
「出路（解脱）に一如を行ず」と言われていますが、その  
まま、念仏して至徳具足の徳をたまわり、常行大悲の益を  
うることを語られているのでないかとささ感じられたので  
あります。

二  
九

正法眼花辨道註

いまあつた切実辨道は証上に万法

をあらわしめ 妙法蓮華の如を行する有り



公身活路 任釋かとなす 系列の在りたおそす 法をい法とそ行しを中

ありました。聖人が「末灯鈔」に放逸無慚の誤ちに陥つて  
いる同行を誡めて「世を厭うしるしもなし」と申されてい  
る御心が領けるのです。その厭う心はそのまま欣求の心に  
表裏します。厭離と欣求が一つになって私の上に働いて下  
さる。それは決して妄念の我が心の中に求め得る事柄では  
ありません。

ところが初め人間はどうしても妄念の我が心に頼らざる  
を得ないものです。その心がとう／＼自己矛盾に行き詰つ  
てしまつて、にっちもさつちも行かなくなる。自分の心に  
期待していたものが総て駄目になつてしまつて、言わば零  
になりかえつたとき「その汝のために喚んでいる」といふ  
光の声に包まれる身となります。こつした消息を古人が、  
「無一物中無尽蔵」と叫んだのではありませんか。二種深  
信は善導大師のこつした体験であると思ひます。機の深信  
とは自己が零になるときの心相といえましょう。自己が零  
になるなどいふと無我の自覚にでも立つかのように思われ  
ては困ります。そんな深い境地をこの私がどうして期しえ  
ましょう。ありのままなる自分の現実を法の真実に照し出  
されるほど自然なることはありません。妄念の外に別の心  
のない己れを知らしめられて、その私の故に喚んでおられ  
る大悲の本願を有難く忝く仰ぐのみです。これを法の深信  
と申されました。それを歎徳文には「至心信樂己れを忘れ

報恩懺式(三)

愚昧

筑紫野 春草

母逝きて三十年になりわれは老いとしき孫も人となり  
たり

邪見驕慢愚昧ほかのなに者ぞ今こそ知れりわれと言ふも  
の

み仏のみそなはします身の上を何かなげかむ南無阿彌  
陀仏

七十年何をなせしとみづからに問ひつむれどもさして答  
へ得ず

あれもこれとはかなく消えぬ彼も我もさびし老いぬす  
べなきままに



# 慈光日誌抄

— 如信上人と唯円大徳を偲ぶ —

西元宗助

如信	1173
如信	1239
如信	1270
如信	1351
如信	1300
如信	1262

去る四月十四日(日)、親鸞聖人時代の常陸の国の中心であった水戸市に赴き、茨城県真宗連合会主催の十周年記念講演会(会場・市内ホール)にて、「念仏申して立ち上がる」と題して、晴がましくも講話させていただき、盛會。

真宗連合会は、茨城県内の大谷派七十カ寺、本願寺派三十数カ寺、高田派三カ寺および単立寺院の稲田の西念寺等で組織され、その会長は歎異抄で有名な唯円坊開基の水戸の報恩寺住職・河和田唯賢師(東大印度哲学科出身、文部省宗

教課長等歴任)。まことに誠実なお方。終了後、席を移して四十数名の住職の方々との懇談会が催される。その節わたしの申しあげた主旨は、ほとんどすべての宗教が、教信・行証、すなわち教を信じて行うに對して、浄土真宗は、罪悪深重煩惱熾盛のわれら悪衆生のため

池山榮吉先生の左のお歌を紹介して、わたし自身の領解とさせていただきます。

よきひとの仰せにききて み名をよべば  
喚ばはせたまふみ声きこえぬ

ともあれ、僧侶のおん方々の真摯でありなされるのに心うたれる。さすがは聖人の常陸の国だけはあると。

翌日は、河和田師令息運転の車にて、同師のご案内により、まず久慈郡大子町上金沢の法龍寺跡にお参りする。

大子町は、たいし町ではなくて、だいが町と呼ばれている。ここは本願寺第二代の如信上人(二三九—一三〇〇)のお墓のあるところ。如信は悲劇の上人という感をまぬがれがたい。その感は、この寂寥たる墓所にお参りして、いよいよその感を深くせざるをえなかった。

如信上人は、聖人によって義絶された、かの善鸞さまの子であつて、いうまでもなく聖人の実孫である。後嗣であつた善鸞を義絶せざるをえなかつた親鸞聖人のご胸中に、言語に絶する悲痛なものがおありだつたことは、そのときのご消息文にある「いまはおや(親)といふことあるべからず、こ(子)とおもふことおも(思)ひ切りたり」(建

長八年五月二九日)のお言葉によつても拝察しうる。ところでそのとき、親鸞聖人は八十四歳、義絶された善鸞の歳は不明であるが、その子の如信は二十二歳(推定)、如信は聖人の膝下にあつて薫育をうけられるが、さぞ淋しく、そして又複雑なお気持ちでおありだつたことであらう。

なお、そのころは常陸の唯円房はすでに上洛して、聖人常隨の弟子(当時三十五歳前後)であつたと推定されるので、若き日の如信上人を慰め励ましたことはまちがいあるまい。そしてそれから六年の後に、親鸞聖人はこの世を去られる。そしてその息女である。如信にとつては叔母にあたる

覚信尼が、やがて東山・大谷に所在する聖人の御墓所を守護する。ところで、その覚信尼の孫・覚如(一一七〇—一三五一)を教育して祖父聖人から面授された他力の信心を覚如(第三代)に伝えたのが、わが如信(したがって次代)上人であつて、そのことは、覚如の『口伝鈔』の巻頭に「本願寺鸞聖人、如信上人に對ししまして、おり／＼の御物語



の條々」とあり、その後記に覚如が「先師上人釈如信」から「面授口決」のことを記していることにも明白である。ときに覚如は十八歳、如信は四十九歳であつたかと推定される。『墓所繪詞三』

それから如信上人は、どうなつたか、如信は父・善鸞の後を追うかのようにして関東に下り、奥郡の大綱を本居として布教されつつ、この辺地に淋しくその生涯を閉じる。享年六十二歳とも六十六歳ともいう。その間、父善鸞としばしばお会いになつたにちがいない。いや、ご一緒にお住まいになつたこともあるにちがいない。いろんなことが想像されて、わたしは涙ぐんだ。

とまれ、先述のように水戸市より車で一時間余の大子町上金沢の法龍寺跡に、如信上人のお墓があり、太子堂がある。そして七百年もたつと言われる周囲一一・一〇メートルの銀杏の巨木と、これも周囲七メートル余の樅の大木が、如信の墓所を護るかのやうにそびえている。

なおこの如信上人終焉の地の入口に、立看板がある。それによつて、遠く御祖如信の墓はひなに荒れて

本願寺ひとり京に栄える。とあつて、釈界雄とある。釈界雄とは、故福島政雄先生(広島文理科大学、建国大学教授を歴任、教育学、近角常観師の高弟)



ではないか。懐しくもあり、かつは驚く。尤も東茨城郡大洗町には如信上人開基の願入寺という立派なお寺があり、そこに如信上人関係の遺品や多くの貴重な資料、さらには水戸黄門寄進の如信上人木像などがあって、ここが上人の御廟所になっているようでもあるので、必ずしも粗末にされているわけではないとのこと。なお、願入寺は、稲田の西念寺と共に、戦後、東西両本願寺から独立して今は単立寺院。

ついで午后、聖人を板敷山に襲わんとして却って聖人に信服し、弟子となったことで有名な山伏の弁円べんげんの故地を案内していただき、弁円改め明法房めいぼうぼうの法専寺ほふせんじ（大宮町東野）に参る。尤もここは大谷派（お栗に所属し、別に本願寺派（お西に、明法房開基の上宮寺という立派なお寺のある、ことを河和田師からご説明いただく。

このように本願寺が、徳川家康の政策によって東西に分裂して以来、聖人の大谷本廟をはじめとして、重要な地所がごとごとく別に設けられたばかりでなく、報恩講や降誕会の月日さえも全く相違することになったことは、まことに残念な極み、思うにまかせぬ娑婆の感を切実にして、ひそかにお念仏申すことでありました。

とまれ、最後に河和田師の御自坊であり、歎異抄で有名

## 音の無い声

昭和五十七年頃とある

昨日は県下の高校の卒業式が一斉に行われました。熊本市の信愛高校では、お嬢さんの写真を胸に抱いた御両親が卒業式に出席しておられました。皆さん覚えていらっしやいますか。去年の四月二十二日、三年生になったばかりの加藤ゆかりさんという方が殺されなされたという事件がありました。その同級生の皆さんが、どうしてもゆかりさんと一緒に式をしたいと先生にお願いしたんだそうです。それで写真で式に参加するということになって、御両親が、ゆかりさんの写真を胸にだいて出席されました。私はゆかりさんのお母さんに何度かお会いしましたが、本当にお気の毒でたまりません。

加藤さんのお家では、なか／＼女の子に恵まれますに、もうあきらめておられたら、女の子が生れたので、あ、御縁があったんだなあというので、縁という字を名前にして、それをゆかりとよんでおられたと（い）ことでした。そのお嬢さんが殺されなされたんですよ。皆さん、自分

な唯円房開基の法喜山・報恩寺に着き、お心のこもった茶菓をいただく。

さすがに由緒あるお寺、風格があり清楚である。殊に簡素なご本堂は、原始真宗教団の道場の面影を残しているようでありがたい。ここには近角常観師の筆になる「唯円坊之碑」文がある。その碑文の末尾に「欲知真諦門奥義、須讀二歎異鈔、欲守俗諦門軌範、須讀蓮如上人御一代記聞書、真諦門の奥義を知らんと欲すれば、すべからず歎異鈔を読むべし、俗諦門の軌範を守らんと欲すれば、すべからず蓮如上人の御一代記聞書を繙くべし」の言葉のあるのは、さすがである。故梅原真隆師も詣でて三首の歌をのこしておられる。その一つは、「報恩寺に詣でて唯円大徳をおもふ」と前置きして、師を慕ひ友をあはれみ歎異鈔泣く泣く筆を染けるものかなお、すぐれた歌人吉野秀雄の、報恩寺に参つて詠み給うた秀歌は、既に三月号に載せられたので遠慮することにいたしますが、もし余白あればお戴せただければ嬉しい。けだし有難いお歌は、なんと拝誦しても有難い。一層有難くなることでございますから。

2.12.9

## 高千穂 正史

の娘を殺された親御さんの気持になって下さい。何ともつらいことですよねえ。

犯人にも親があるはずです。この犯人は、殺したお嬢さんのご両親の気持、また自分の親のことなど、まったく考えなかつたのでしょうか。

昔から、親の心子知らず、と申しますが、この頃は、まったく親の心を知らない、受けとらない人間が増えてきたのじゃないでしょうか。どんなに学歴があっても、金もうけしても、親の心がわからんような人間は、人間じゃないと思います。

私も大の親不孝者ですが、今朝は、私の父のことをお話してみたいと思います。

私の父は、声の出ない坊さんでした。父は、京都の龍谷大学の先生をしております、まあ仏教の学者でした。

昭和二十三年の今頃ですが、声帯ガンのために、のどを



切り取ってしまう大手術を受けたんです。それから、すっかり声が出なくなりまして。その時、父は五十歳でした。昭和五十年の暮に七十七歳でなくなりましたが、二十七年間、声の無い住職として頑張ってくれました。

声の出ない坊さんというものは、皆さん、本當につらいのですよ。お経を読むことも出来ない。お説教をすることもできないのです。

この前、八代にまいりましたら、元氣のい、おばあちゃん達がおられて、こんなことを言われました。

「高千穂さん。昔は、百姓と坊んさんはゴ、エ次第と言いましたよ」

これは、農業では肥料のこえが大事、坊さんはお経を読む、或はお説教する声がいい声でなくてはならないのです。大笑いしましたが、そのあとで、私は、父はつらかったろうなあと、思つて胸いっぱいになりました。

手術をうけて、声を失つた父は、京都から熊本の寺へ帰りまして、毎日々々お掃除をしておりました。

京都においでになつた方はご存知でしょうが、法然院というお寺があります。いつも、お庭がとても美しくお掃除してあるお寺ですね。あそこ、台所に大きな衝立がありまして、それに「一に掃除、二に勤行とて、落葉はく」という俳句が書いてあるんです。

まわりの人達からは、随分叱られもし、また悪口や批判も受けました。しかし、父はだまって、私を視ていてくれました。限りなく私を許してくれました。

皆さん、この広い世の中で、限りなくこの私を許し、抱いてくれるのは親だけではないでしょうか。またそういう親の心が無いならば、私達の心は、どこにも帰るところを知らず、淋しく迷つてしまふのではないのでしょうか。

父の晩年、私も少しはまじめになりました。仏教の勉強をしたり、あちこち講演に出かけたりするようになりました。阿蘇や天草のお寺、田舎の婦人会や青年会にお話にまゐりますと、うちに帰り着くのは夜おそくなります。父は自分の体を大事にしております。わりと早くやすんでおりましたが、私が帰りますまでは、必ず目を覚まして待っております。

私は、おこさないようにと思ひまして、父のやすんでおります部屋の隣り部屋で

「お父さん、ただいまかえりました」

と小さな声で挨拶をしておりましたが、いつも、それまで目を覚ましておりました

「きつかったね。はよおやすみ」

と、言つてくれたのです。それは、どなたにも聞こえない

私の父は、若い頃から、この言葉が好きで、声を失つてから、その通りの生活でした。勤行というのは、おつとめ、お経をあげることです。

お寺の便所というのは、多勢の方が使われますので、よくよごれるんです。それを膝をつくようにして、毎日お掃除をしておりました。

それから、言葉が出ませんものだから、いつも、笑顔で、ニコニコしておりました。お釈迦様は、笑顔もお布施であるぞと説いておられますが、どなたにも、あたたかな笑顔で接しておりました。

それと、よく手紙を書いておりました。本當によく書いておりました。自分は声が出ないからと思つてでしようか、毎日々々、よくもこんなに書けるものだと思われるほど、手紙を書いては出しておりました。

この頃は、電話という便利なものがありますから、お互いに、あんまり手紙を書きませんねえ。ことに、品物を頂いたり、もらつたお手紙には、すぐお札状や、ご返事を書かねばいけないんでしようが、これもなか／＼できません。そういう、半分病人の父に、私は親不孝を続けました。

若い頃は、お寺を継いで坊さんになるといふのが、どうもいやでしてね、ひどい親不孝を続けたのです。多くの方に迷惑をかけるようなこともありまして。

い言葉です。

私達家族は、長い間、声の出ない父と一緒に暮しておりましたので、唇の動きで、ふだん父の言いたいことは殆んどわかつてはおりましたが、ふすまの向うではわかるはずがありません。

しかし、いつの間にか、隣りの部屋の父の唇の動きが、かすかな、かすかな響きではありますが、私にははつきり聞こえるようになっておりました。

父がなくなりまして、もう七年になりますが、今でも、つかれたとき、少しまいてるとき、

「きつかったね、はよおやすみ」

とかすかすかな父の声の聞こえてくるような気がいたします。そして、そのかすかすかすけれど、なつかしい声の背後に、もつと大きな呼び声を私は感じるのです。

このつまらない、思い上つた私を、常に呼び給う声なき声、それが、み仏の声なのではないでしょうか。

今朝は自分のうちの事をお話してしまいました、お許し下さい。これで失礼します。

（仏藏寺住職 熊本放送局常任司会者  
熊本日日新聞読者相談室相談員）



# み名を聞きて

木村 知己

何という本でしたか、今思い出せませんが、川上清吉先生（島根県人で教育者であり篤信者）が次の様な事を書いておられるのを読み、深い感銘を受けまして忘れ得ないのであります。

「私は次々と幼い子供を亡くしました。人間として子供に先立たれるという事程、悲しい事はありません。枕頭にあって、自分がかわつて死んでやれるものなら死んでやりたいと痛切に思う事があります。

樂しみは分け合う事が出来ても、苦しみは分け合うと云う事が出来ません。

子供の病がだん／＼重くなつて来ると、父も母も唯子供の名を呼び続けるばかりであります。「太郎や」「花子や」元氣を出すんですよと、喰い入らんばかりに吾が子の名を呼び続けるのであります。

然し、もう何も通じないととなると、親の呼ぶのは、ただ「お父さんじゃぞ」「お母さんじゃぞ」「わかるか！」と

絶叫しつつ可愛い吾が子をしっかりと抱き取るばかりでありました。

此処に親の慈愛の眞実の叫びがあるのであります。この様な悲しい出来事を通じて、私は「みほとけ」の大悲心をはたと知らせて頂いたのであります。

と申しますのは「みほとけ」様が、私達衆生にお呼びかけ下さるのに、どうして「清吉<sup>せいき</sup>よと呼んで下さらずに、「みほとけ」自身の「み名」「南無阿彌陀仏」をもってお呼びになるのであるかと不審に思い／＼していた事が氷解してはつきり知らせて頂きました。

「お父さんじゃぞ」「おつかさんはここに居るぞ」との大悲心から、みほとけ自身の「み名」「南無阿彌陀仏」をもって私達に呼びかけて下さるのであります。

この川上先生のお話によつて、「南無阿彌陀仏」のおいわれを知らせていただきました。「おつかさんじゃぞ」との大悲の願心をひしひしと感じつつ「おつかさん」とただただ

お念仏申させていたばかりであります。

## 泉 滴 抄

耳と口

耳と口とは深いつながりがある。

耳の聞こえぬ人は、発声法を教えられない限り言葉がいない。

人の言葉を全然聞かぬ人は、勝手放題のことをいう。

また、人の言葉を軽く聞き流す人は、自分の言葉につきしみが無い。

聞くという事は、非常に大切なことである。

唯聞く、耳を傾けて聞く、心を傾けて聴く。色々あるが、何事も心を傾けて聴く時、悪口、雑言も良き師となり、正しい言葉を教えてくれる。

人間だけに言葉があるが、聞くことをしないと、動物にも劣る浅ましいことをいうものである。

## 手を合わそう

夏からの腸結核と、それにつぐ混合感染の高熱からだんだん立ち直つて、秋に入ると共にすこしずつながら肥えて順調な経過を取つてきていたのに、急な冷えこみから気管支の拡張をきたし、喘息様の呼吸困難におちいり、十日間ほど苦しみました。

鼻をつまんで息をするような思いで、食事時には本当に

困りました。それでも朝晩、温湿布をして貰つたおかげで、次第に息苦しきも和らぎ、十日目くらいにホッと一息つきました。

朝ご飯がおいしく食べられるのです。「ああ、おいしいなあ！」と思わずフツと息をつきました。今までの苦しきからの息ではなしに、今日の空気のなんとさわやかなことでしょう。おいしい空気だなあと思うと共に、

「おおそうだ。空気というものがあつたのだ。空気があつたのだ！」

と気づくと同時に、止めどなく涙がにじんで来るのをどうすることも出来ませんでした。結核患者のはかない感傷とお笑い下さいますな。私には忘れられない感激だったのです。私は空気をどおして、そこに「ほとけ」を感じました。「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん」という西岸上のみほとけのお呼び声を感じました。

## たすからぬ身に

聞法<sup>もんぽう</sup> 何を聞くのか。

結局、たすかるところのないことを聞くのだ。

たすかるところのない身と聞いてたすけられるのである。

たすからぬ身にしみわたる御名の声

（無名戦士の辞世の句）



# 歎異抄に導かれて

佛語を金言とも實語とも稱えられる。金は何時までも錆が出ないし、実とはかならずもののみとなることを称えられたのである。その具体的な現れは、智慧の念仏をいただき、信心の智慧のひらけた剛信者の上に見ることが出来る。それを、本抄の上に親鸞聖人の仰せの中に聞くことが出来る。私はこちらに心うたれて、かつて本抄の讃歌を作った。

こよなくもくしきみだからここにみちみつ  
さえられぬ とはのみひかり ここにかがやく  
きよらにてつきぬましみずここにわきいづ  
旅人よとりてよめ よにまれし ねがいみてらふ  
旅人よ あおぎみよとわのやみ そこにひらけん  
旅人よ くみてのめ かわけるみ そこにうるほふ

花田 正夫

ひかりあやなすまことのことは  
あめつちのはてばてまでも  
ひたぶるに われはたたえん  
さて、歎異のころは、異なる者はいかぬと斥けるので、それでもよいと許すでもない。異なることをわがこ

私に愛知県の教護連盟に四年間勤めて、問題の生徒の相談役をして、はじめて生みの親だけが子の非行をわが責任として背負う姿に接した。そこに歎異の心はそのまま久遠のみ親の悲歎と知らされた。  
親鸞聖人が、唯田房の「念仏をよろぶころもおこらずまた浄土に急ぎまいりたき心のない」と訴えた時、「親鸞もこの不審ありつるに、唯田房おなじころにてありけり」と同心同座されるお心にそれを仰いだのである。

りぬる

と詠じられたのもその味である。教を沢山読んでおほえることではなく、一句半偈の中にもそこに自分の心がうつし出されているのに驚くばかりである。

蓮如上人の御一代記聞書の中に、六人が直々に御法話をお聞きし、あまりに有難いので、座をかえて六人が夫々に自分の聞いたまを述べたところ、四人までがとり違えていたと書かれている。上人はこのことをよく知られて「すべて種も時きたてはいかぬ」とくりかえされ、聞いたまを言え、そして間違いを直してもらえと誠められている。これについて卑近な話であるが、琴の名人といわれた宮城道雄氏の随筆の中に「岡山からはまぐりを送られたので親友の内田百問氏にもお裾分けしようと思ひ、女中さんに内田さんに電話してはまぐりはおきらいでないかを聞いてくれと頼むと、あまぐりと聞き違へて内田さん宅の女中にとある。聞く人の心次第で間違い易いことを教えられた。

華嚴経について金獅子の譬がある。金獅子はどこに触れても金で、その一部がわかると全体がわかると云われる。本抄もまた、全体を読まねばいかぬではない、この抄の

萬さのまんが思するして思つて、貴車御本出

支の歎異抄に導かれて  
夏はの御講義、まじりて御合衆の高僧さん

○  
○

こよなくもくしきみだからここにみちみつ  
さえられぬ とはのみひかり ここにかがやく  
きよらにてつきぬましみずここにわきいづ

旅人よとりてよめ よにまれし ねがいみてらふ  
旅人よ あおぎみよとわのやみ そこにひらけん  
旅人よ くみてのめ かわけるみ そこにうるほふ

さて私は永い間、異解者を他人事とばかり思っていたが、或る件から、仏教は消極的で、偶像崇拜だと非難する声を聞いた時、「出る息と引く息あつてはじめて呼吸が出来る。親の墓前に跪くのは石を拜むのではない、墓碑を通して親の心を謝しているのだ」等々と弁明し、わが宗こそ尊しという心がおこるにつけて、歎異抄の十二章の「わが宗こそ勝れたれ、ひとの宗は劣りなり」と云うから「法敵もいできたり、謗法もおこる」だからそういう思いこそ「自らわが法を破謗するにあらずや」の一文が心をうち  
限りなき歎異のなみだ唯田の ころもしらで五十路す  
ぎゆく

と腰折一首に慚愧させられたことである。異解者われなりとなり、唯田の涙はこの私の上にそそがれていたと謝したことである。  
○  
○  
攬教照心（教をとりて心を照らす）と昔から云われる。というの、仏が「鏡は鏡自身を写し得ないように、如何なる智者といえども、身辺三尺は暗闇である」と教えられ。所詮最も完全な、仏の鏡に照らされて自分の心を知られるばかりである。源信僧都は  
夜もすがら仏の道をもとむればわがころにぞたずねい



何処かが身にしむと、そこから全体のころも味えるのである。大海の潮も全部飲まねば分らぬでなく、一掬すれば全体の塩味がわかるように。具体的に申せば、聖人の常の仰せ「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなきよ」は、聖人の御一生を通して何時でも何処でもくり返えされたもので、この一文が本抄をはじめ、本典、和讃にも通じるのを拝する。そしてそのまま、私一人がためと知らされ、同時に罪業深重煩惱熾盛の身のためと慚愧せしめられるのである。

さて、金言、實語は、私共としては、わかるわからぬにおいて、耳から目から、常に心の田に種を蒔いておかねばならぬ。それは、秋の末に地におち草木の実が、寒い冬をき越して、春の暖かさとおしめりをうけると、あちらこちらに芽を出し、やがて花を開き実を結ぶように、仏語が心に蒔かれると、時節到来すると、ああこれであつたと、大きくうなづき、生きた言葉となって身につくのである。若し仏語をくりかえして心の田に蒔いていないと、時節が到来しても信の芽が出ないのである。蓮如上人が「御聖教はくれ／＼。読書百遍意おのづから通ず」と勧められたのも、

大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧光なり」と示され、而も「愚禿釈親鸞述」とあり、教の巻以後は「集」と自書されている。「述・集」は孔夫子が、自分が作ったものは自分と共に亡びる。自分は古聖の三皇・五帝の教を集めて大成しただけで、自分としては述べるばかりである。とある無私な心に同心されたかである。

すべて無我なる人を通して真美は告げられる。他山の石であるが、リンカーンが奴隷解放に成功した時、「トム小父さんの小屋」という悲惨な奴隷の生活を小説に発表し、欧州の人々の心をうち、リンカーンを援助したので、その著者のストウ夫人を招いて、労を謝した時「あれは私が作ったものではないですね。唯悲惨な奴隷の生活を神がみそなはしてのみ、こころを述べただけで、私は単なるペンホルダーです」と答えている。

無我なる人によってのみ真実のいのちが伝わってくる、唯合掌していただくばかりである。

「自見の学悟をもって、他力の宗旨を乱ることなかれ」とある。ここで乱すでなく乱るとあるのに刮目せしめられる。黒い雲がどんなに空を覆っても月の光を消すことは出来ないように、真如法性の仏の光明は、我々の煩惱の雲霧で消すことは出来ない、点滴が岩をも穿つように、倦むこ

實語の持つ不思議さを確信せられるからであつた。池山先生は、「竹子に傷をつけておくとその時は目立たぬが大きく竹が生長すると傷もあきらかになるように、仏法を心に入れておくと、むなしくなることはない」と云われ、学生時代の私共に「どうか耳だけ借しておくれ、今わからなくても、必ずいつかは味えるから」とも云われたのも、唯仏是真の確信からであつた。

法然上人は聖教を繙く時の注意として「善人・智者の救われるところは他人事と思ひ、悪人・愚人の救われるところをわが事と思え」と云われた。そして御自身を十悪・愚痴の法然房と名乗られたのも、観無量寿経に、凡夫にして最もつたない下品の者が念仏往生するところに「この品すこぶる我等が分に相当せり」と、そこに御自身を見出されたからであつた。「余が如き頑魯の者」と云われた源信僧都もそこに御自身を見出され「極重悪人唯稱仏」と願心をおが身にいただかれたのである。

本抄の序を拝読する時、最初に心を打たれるのは、「ひそかに愚案をめぐらしてほぼ古今をかんがふるに」とある一句である。親鸞聖人は、教行信証のはじめに「ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する

とのない大悲の常照によって、やがて疑えない身にさせて下さるのである、これひとえに仏力のお蔭である。

「御物語の趣き、耳の底に留る所」とある。私自身、念仏の師や友によって耳にした言葉で、時が経つにつれてあざやかに心にひびくものがある。これに反して世間の言葉はみな時の流れに消されてゆく、仏心からあふれ出た信仰上の言葉だけが不思議にも不滅の光を放つ。

そこに、英雄豪傑と云われた人は、当時の人にさわがれたが、時がすぎると「夏草や つわものどもが夢のあと」となる。これに反して、親鸞聖人は御在世の時にはそう世間からさわがれた人でなかつたが、八百年もすぎた今日、東山大谷の御廟の前に年々御慈育を喜んで御礼まいりする人の群れは続いている。恰も親の在世中は姿形にとらえられて親心を見落し勝であるが、地上に親が姿を消してからはじめて親心の片鱗にふれはじめような趣きが聖人にあり、そこに久遠の人類の御親を聖人の上に仰ぐのである。





あ

と

が

き

三伏の夏の光線はきびしく、樹蔭がこひしい頃となりました。御健勝を祈念申し上げます。

近角先生のお原稿は、信を行く旅人に大切な御注意をいただきました。信仰には卒業はなく、「永遠の黎明」の趣きがあると福島政雄先生が名言をのこして下さいましたことも思い併せられました。

池山先生の仏心の至極を子守唄の中に見出されてのお味い「為何閻世不入涅槃」と仰言つた仏心そのまゝであります。而も聖人は五逆の阿闍世こそ我なりと仰がれて「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをなすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」と随喜していただけるのであります。

井上先生は先般来体調御不和のため療養せられました。その機縁に色々とお気づきになり、その一端を誌して下さいました。永観律師は「病もまた善知識なり」と云われ、「病身のお蔭で、学者にならず仏法者になれた」と述べられました。然し先日快気の御報せを頂きました。

西元先生はかねてからのお念願であつた如信上人と唯円房ゆかりの地を訪ねられての御感想をこまかに誌して下さいました。

いました。私は関東の聖人の御旧蹟はお参り出来ませんでした。高千穂正史先生は御尊父徹乗師を偲ばれて貴重な一文を草して下さいました。徹乗師は喉頭癌の大手術をうけられて言葉を失われ、京都を引きあげて郷里での御静居、その頃から私はことに御親交をいただきました。今や宝林壇上から御照覧下さることです。この一文は大法輪から転載、音のない声とは鳴かぬ鳥の声でしょう。

木村知巳様は大戦に出陣せられましたが身体を損われて療養生活六年、二九年に亡くなれましたが、その御遺稿をもとに「護念されている生命」を昭和五十年に出版せられたものから極く僅かを抄出させていただきました。私の歎異抄に導かれては、改めて御教を仰ぎましたままを誌しました。例会にこれから続けて讃仰させていただきます。七月二十一日に催しますが、八月は例年のように休ませていただきます。御諒承願います。

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
坂部光雄  
定価 半年 八〇〇円(送共) 一年 一六〇〇円(送共) 印刷人  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
坂部光雄  
発行所  
名古屋市南区駈上二丁目四五九  
名古屋市南区駈上二丁目四五九  
編集・発行人 花田正夫  
電話 八二局七〇三七番  
振替口座 名古屋 六二〇四七番  
郵便番号 四一五七

慈光社